5/28～
中井先生
（男性用）

速水　私が生涯部長と呼べるのはあなたお一人です。部長、何故、控訴なさらなかったんです。最高裁判所

部長　水野君は、元気にしてますか？

速水　水野さんは胸を患っておられました。先ほど、帯広中央病院の集中治療室に入られました。重体です。

部長　なんですって。

速水　あの人は言ったんです。部長が死んだら私も死ぬと。今、必死に生きていらっしゃいます。部長、本当のことを教えて頂けませんか。

部長　なんですか本当のことって。

速水　兄を殺したのはあなたではない。

部長　ハハハ。

速水　所詮、オカマは人間のクズでしたか。スポーツってのはそんなもんじゃないんですよ、スポーツってのは。何の為にブブカがロスでつきあげた金メダルを地面に叩きつけたのか、あんたが来なかったからだ。なんのためにニールセンが突然引退を表明したのか、あんたが来なかったからだ。なんのために南アフリカ共和国黒人ブライアンがアパルトヘイトに抗い死んでいったのか、あんたがロスに来なかったからだ。あんたと戦って金メダルをとりたかったからだ。共に六メートル八十八に挑戦したかったからだ。ブブカの選手生命を奪い、ニールセンに二度と棒を持たせる気をなくさせ、ブライアンを死に追いやったのも全てあんただ。…水野さんが犠牲だった？　何カッコつけてんんだオメエは！水野さんは、あの十年間を犠牲だったとは思っていない。水野さんはあんたと過ごせた捜査室での十年間を人生の至福の時と思っていらっしゃる！　あなたはブブカの為にも、ニールセンの為にも、死んでいったブライアンの為にも、いいえ、あの水野朋子という一人の女の人間の尊厳の為に本当のことを言わなければいけません。私はね、不憫でならないんですわ。窓に横なぐりの雪が降りつける帯広中央病院で、せめて、せめてあなたと死の時を同じくしようと今、必死に生きていらっしゃる水野さんが哀れでならないんです。

水野の病院での心電図の音。

部長　私は速水を愛していました。あいつにはロサンゼルスオリンピックで金メダルを取って欲しかったんです。私とあいつが暮らしていたのは、汚い下高井戸の四畳半のアパートでした。私は朝早くに起き、アパートの階段を降り土肩の現場に向かい、夜は新宿のゲイバーで一日に四人も五人も客をとっていました。みんなあいつの合宿費用や練習費用を出すためです。しかし、あいつはその間、その部屋に何人も男を連れ込んでたんです。その部屋で私の手さえ握ってくれなかった。あいつはオリンピックを控えた大事な体です。私も指一本触れませんでしたからねぇ。あいつは酒かっくらってその後も遊びまわっていました。そしてついに練習しなくなってしまった。私は言ったんだ。

「オマエはオリンピックの選手なんだからやめてくれ」って。しかし、あいつは、練習しなかった。
オリンピックの決勝の前夜、あいつ私のとこきましてね、
「キーちゃん、オレ金メダル欲しいよぉ」って私に縋って泣くんです。
「キーちゃん、ブブカの棒にキズ入れてきてくれ、折れるようにしてきてくれ」って私に縋って泣くんですよ。私は言ったんだ。
「オマエ、そんな事をして金メダルを取って何になる。オリンピックの金メダルをとる者は正義なれ、青少年の規範となれと、オリンピック憲章にも謳ってあるだろ。お前そんなことして、金メダルを取って嬉しいのか？」って。そしたらあいつ、私のことを殴りました。何度も何度も私のことを殴りました。
「キーちゃん、オマエはオレのこと愛してねえのかよ。愛してんだろ。抱かれたいんだろ。抱かれたかったら傷入れてこいよ。折れるようにしてこいよ。そしたら抱いてやるからよ。抱かれたくねぇのかよ、抱かれたくねえのかよ」って。
抱かれたかったです。死ぬほど抱かれたかったです。愛していましたからねぇ。しかしブブカはね、六メートル五十八から六メートル六十二のわずか四センチ上げるのに十年かかってるんです。あの、年に二百日は雪に閉ざされるというシベリアで毎日二千回のスクワット、二千回の腕立て伏せ、二十キロのランニング。それでも十年で、たったの四センチしかあがらないんです。スポーツってのはそんなもんなんです。この私がそんな精進しているブブカの棒にニールセンの棒に傷なんか入れられますか。あいつは筋肉強化剤をやってました。それを私が喋ると思ったんですなあ、モンテカルロで車のブレーキに細工したのは、あいつです。私を殺そうとしたんです。私が、…愛する男のことを喋ると思いますか。喋ると思いますか！

速水　部長、あなたならあの六メートル八十八を越えられましたか。

部長　速水くん！

速水　何です。

部長　私は誰よりも鳥になりたかった男だ！　私なら越えられました！

速水　今、ロサンゼルス、ジョン・F・ケネディ・メモリアルスタジアムのバーの高さはマキシマムポイント、六メートル八十八に設定されました。この前人未到の大記録に日本、木村君、今、挑まんとしております。一回目のホイッスルが鳴りました。四十秒後には日本木村、助走を開始しなければなりません。しかし、ロッキーから吹き下ろすその風は、追い風４・５メートル、羽が触れるだけでもバーは落ちてしまいます。木村、挑むような視線でそのバーを睨みつけております。貴賓席には常陸宮妃殿下華子様が身を乗り出し、「木村がんばれ！」と大声援を送っておられます。ニールセンが跪き「風よ止まれ！この栄光の男のために」と胸に十字を切り祈っております。ブブカがタオルを持って走り寄って来ました。「ダスターニャ・木村。エルトラードバルド。木村ガンバレ。君は鳥になるのだ」と、力強く木村の手を握

りしめました。さあ、二回目のホイッスルが鳴った。スタジアムが静まりかえった。今、早稲田の木村、助走を開始いたしました。木村のその美しい肢体が風になびき、ぐんぐんスピードを増していきます。この十五メートルに男達の三千年の願いがかかっているのです。さあ、棒がボックスに突き刺さった。棒がしなり、木村の身体が宙に浮き、両足を垂直に突き上げロックバックの態勢に入りました。風が止みました。奇跡です風が止みました。木村腹筋を硬め、バーを越えた、バーを越えた。バーが揺れた。落ちるか？　木村の身体が着地した後、七秒間、バーが落ちる事がなければこの大記録は成立いたします。カウントダウンに入りました。七、六、五！　六万の観衆と七十億全世界の国民が祈るような思いで声を合わせております。四、三、二、成立いたしました！　人は今、人類は今、鳥になったのであります！

部長　やった、…やったー！　速水、速水、やったぞ！

ゴキリと音がし、木村、首を吊られる。ピーという心電図の音。水野の死を予感させる。

暗転。

音楽『レット・イット・ビー・ゼア』。

幕